

筑波大学日本文学会会報

第10号

昭和61年 1月

「太郎」の話……………	伊藤 博……………	一
日本文学会だより……………	……………	三
研究室だより……………	……………	六
教官新刊紹介……………	……………	八
卒業生だより……………	……………	九
日本文学研究室教官学生名簿……………	……………	十四

「太郎」の話

伊 藤 博

昭和五十六年十一月の末、犬を飼うことにした。家に閉じこもってばかりいる私の健康を心配した長女の提案による。ちょうどその頃、家内の知人の家で、数匹の仔犬の処置に苦しんでいた。父親は定かでないけれども、母親は血統書付きで、れっきとした秋田犬だという。その仔犬の中の一羽元氣なのを貰ってきて、「太郎」と命名した。

家族の一員として優しく厳しく育てようというのが、一家の約束であった。私の、時の心底には、限りない愛情のもとにこよなく厳しく躡けた場合、犬はどのようになるものであるかという思いがあった。恩を売ろうとせず、誠心誠意、この犬に相對してみようと思った。こうした思いの最初の具現として、新しい表札を作り、一家の名前を列挙した末尾に、「伊藤太郎 昭和五十六年十月二十三日生」と記した。「十月二十三日」は、奇しくも長女の生れた月日と同じで、太郎に対する私の夢はますますふくらんだ。

「おすわり」「ふせ」「寝んね」「お立ち」「お手」「お食べ」「お入り」等々の基本的な指示に従う習慣は、長男の力によってすぐ身につけた。拾い食いをしない、見知らぬ人が差し出す物には食指を動かさない、めったなことでは吠えない等々のことも、一家で、やや時間をかけて躡けることができた。一家揃って家を空けなければならぬ時には、太郎を知る院生の有志に散歩と給食を依頼し、前以て、家内

がその指示に従うべきことを懇々と言い聞かせた。院生たちのあとからの報告によると、きわめて従順で節度正しかったという。

翌五十七年の五月五日には、初節句を祝って、犬小屋の脇に小さな鯉のぼりを立ててやった。朝夕の散歩は当然のこととして、夏には、一週に一度かならず風呂に入れた。誕生日には、一家で歌を唱いながら飛び切り上等のステーキを饗応し、あとでケーキを振舞った。一回目の誕生日の頃には、勤めから帰る長女の車の音を二、三分前から聞き分けたり、家内が買物に行く姿と外出する姿とを区別して意志表示をしたりすることができるようになった。また、とくに家に入りたいたい時には、玄関の水道の所へ、足拭いの雑巾をくわえて運ぶようになった。さらに、夜一回だけの食事が定刻より遅れると、ガラス戸をノックして会図するようにもなった。郵便を持って散歩に出ると郵便局の方角に向う知恵もついた。こちらが一切求めなかったせいもあって、器用な芸は何一つできない。けれども、根底のところ家族同様の生活ができるようになったことを一同でよろこび、それは一家の教育方針の成果に相違ないと確認しあった。

実は、その蔭で、私は太郎と独自の接し方をした。誰もいない時に、書斎に上げて「おすわり」をさせ、太郎の鼻先で萬葉歌を吟じてやるのがそれであった。犬が萬葉歌を解するなど信じたわけではない。ただ、書斎で萬葉歌を吟じてやれば、よその犬にはない古典的品格がおのずから具わるのではないかと期待した。「籠もよみ籠持ち……」から始めた。だが、太郎は呆けた表情のまま、鼻をびくびく動かすだけであった。そして私の口をべろりと舐めた。「たまきはる宇智の大野に馬並めて……」。度重なるうちに、太郎はそそくさと「寝んね」の姿勢を取り、白い眼をじっと私の方に向けるようになった。私は太郎への萬葉歌吟誦をやめることにした。

それからまもない頃の、ある日曜日の夕方、太郎がいなくなった。鎖が切れたまま、影も形も見えない。私と長男が自転車、家内と長女が自動車で、心当りの道や野を探した。どこにもいない。「大学教授の愛犬、幼児を噛み殺す」——こんな記事があしたの新聞に出るかも知れぬと、長男がおどした。そう言われた時、私の脳裡に、書斎の本棚のあいだに寝そべる太郎の姿が浮かんだ。「あいつは竹園ショッピングの書店にいるかもしれぬ」。長男をやったところ、案の上、太郎は書店のレジの下に寝そべり、取り巻く人々にちらりちらり眼を遣っていたという。

昭和五十九年の十月三日、長女が静岡の英語学者と結婚した。愛用の赤い車も、むろん静岡へ行った。翌朝の散歩の帰りのことである。太郎が、長女の車庫のあとに踏みとどまって動こうとしない。そして、しきりに鼻をくゆらせている。同じ行為が以後二日続

いた。太郎は長女が遠くへ行ったことを知り、その跡を追い求めている。じーんときた。この犬の死に目には逢いたくないと、しみじみ思った。

日本文学会報も第十号を迎え、筑波大学は創立十三年目に入ろうとしている。さまざまな学生がいた。なつかしい。その学生たちを思い出すのは、決まって、太郎を散歩させている時である。よって、第十号を記念して「太郎」の話をしてみた。会員諸賢のご健康とご活躍を祈る。(昭和六十年十二月十三日)